会報

〒183－8534
東京都府中市朝日町3-11-1
東京外国語大学
ロシア語渡辺研究室内
東京外語ロシア会
TEL＆FAX 042-330-5265
振替口座 00110-8-22338

芝居に熱中した学生時代

会長　原　卓也

原　卓也会長

東京外語大の府中新キャンパスも完成して、この九月二十七日にはオープニング・セレモニーが催されるし、「外語にしては立派すぎる」などと言う人さえいるらしい新校舎での授業も、十月一日から開講されるときく。まことにめでたい限りだ。

今さら蒸し返す話でもないのかもしれないが、東京外語という学校は昔から建物に苦労しつづけてきており、大正のはじめ神田錦町にあった校舎が大火で全焼、引越した麹町の校舎は関東大震災で焼失、現在の北区西ヶ原に建てた校舎も第二次大戦で灰となり、そのあとしばらくあちこちに間借りや居候をかさねる時期がつづいた。

わたしが東京外事専門学校で学んだ昭和二十三年から二十六年までは、板橋区（現在は練馬区）上石神井にある智山中学の一部を借り、それだけでは教室が足りないので、雨が降るとどぶ川のようになる狭い坂道を五分くらい歩いたところにある、東京工業専門学校付属の電波兵器技術専修学校跡に建てた仮校舎とで授業を行なっていた。仮校舎といっても、建築現場のプレハブ同然の代物で、窓にガラスも入っておらず、代りに貼った障子紙は、暖房のない教室で手あぶり用に燃されたり、鼻紙代りに使われたりするので、寒風が容赦なくじかに吹きこみ、隣近所の他語科の授業がそのままきこえてくる、まこと国際的な雰囲気であった。

それだけに新制大学に編入して、西ヶ原の新校舎で学ぶようになった時には、やっと大学生になれたという思いだった。浮かれたわたしたち演劇部の学生は、部の活動資金かせぎもかねて、「新校舎落成記念ダンスパーティ」を企画し、女子大めぐりをして切符を売って歩いた。ところが、肝腎の外語の学生たちがダンスを踊れないので、急遽わたしがにわか講師になって、基本的なステップの講習会を開いたりした。ダンスパーティはまずまずの成功であったように記憶するが、それよりも、パーティに来た女子大生が「新校舎といっても、まさかこの建物じゃないわよね。まあ、この校舎も新しいことは新しいけど」と言って、狭いキャンパス内を探り歩いていたのがショックだった。

肝腎の勉強の方だが、最初は入りにくかったロシア語も、さすがに二、三年も頑張っていれば少しは理解できるようになり、そうなると秋の語劇祭が楽しみになった。

昭和二十六年、外事専門学校ではチェーホフのヴォードビル『熊』を上演した。主従のスミルノフを演じた佐俣卓彦の熱血的な演技はめざましかったし、未亡人ポポワを演じた、のちの読売新聞モスクワ支局長、大朋人一の妖艶な姿も満場の拍手を買ったものだった。専門学校には女子学生がいなかったため、女形を起用せざるを得なかったのである。

新制大学ではやはりチェーホフの一幕物ヴォードビル『披露宴』を舞台にかけた。登場人物が多くてむずかしかったが、それだけに楽しさもひとしおだった。珍妙なロシア語をあやつるギリシャ人ドゥインバ役をやった、のちのマヤコフスキー全集訳者の小笠原豊樹（詩人の岩田宏）は、ロシア語を知らぬ観客さえ笑いころがせる名演技を披露してくれたし、海軍将校レヴノフを演じた川岸貞一郎（イタリア文学の千種堅）は、舌を噛みそうな長い難解な海軍用語をみごとにこなしてくれた。新婦の父親ジガーロフ役の島地純（ロシア演劇研究家の牧原純）など、学生芝居とは思えない老成ぶりだった。なにより特筆すべきは、この『披露宴』で東京外語の歴史上はじめて、語劇に女子学生が出演したことである。当時まだ一、二年だった柴田（本橋）富佐子、真木（志村）三三子らの諸嬢に、半世紀ぶりにあらためてお礼を申し上げたい。

語劇だけでは物足りなくなったわたしは、やがて演劇部に入った。わたしが学長を仰せつかった時、学生部長として文字通りわたしの右腕となってくれた若林俊輔教授（E30）、共同通信常務理事をしていた亀山旭（S29）、麗沢大学教授だった落合亮一（D29）などが仲間だった。テネシー・ウィリアムズ『ガラスの動物園』、三好十郎『浮標』などを上演した。この時もやはり、日本女子大、東京女子大の演劇部に協力をねがったものだ。

こうして書いてみると、外語時代わたしは芝居にばかり熱中していたような気がするし、たしかにそれに相違はないのだけれど、今あの頃のことをこまごま思いだしているうちに、とうに忘れていた「青春」という言葉が、なつかしくよみがえってきた思いである。（昭28卒・前東京外国語大学学長）

一九〇〇（明治三十三）年から二〇〇〇（平成十二）年までのロシア語科・ロシア東欧課程ロシア語専攻卒業生数

現存者	三、五五一名
うち消息不明者	二、六八三名
物故者	一八二名
	八六八名

（東京外語会名簿委員会の本年九月二十二日現在のデータによる）

学科の呼称は、東京外国語学校露語部、東京外事専門学校ロシヤ科、東京外国語大学ロシヤ語学科、ロシヤ・東欧語学科ロシヤ語専攻、ロシア・東欧課程ロシア語専攻、などと変わってきていますが、専攻語がロシア語であることに変わりはありません。

一九〇〇年当時、英・佛・獨・露・西・清・韓・伊の八学科がありましたが、現在、東京外国語大学にある専攻語は26言語におよびます。

ちなみに、この一〇一年間に母校を卒業した人の数は英語科、スペイン語科、中国語科の順に多く、ロシア語科がこれにつづきます。

府中だより

渡辺雅司

西ヶ原から府中へ

例年にない猛暑の中、八月初旬まで授業、前期試験を行ない、その後教職員が力をふりしぼって一挙に研究室、各部局の引越しをやっと済ませました。（と言っても、これを書いている時点では、新キャンパスは段ボールならぬプラスチックの折りコンの山また山です。）新しい学舎は、これまでの大学のイメージを一新する煉瓦張り、八階までの吹き抜けで、各階にラウンジが設けられ、随所に遊びのある構造で、調布飛行場のおかげ（？）で騒音防止のために、外語史上はじめて全館冷暖房完備となりました。

それにしても外語は墓地とよくよく縁があるようで、染井霊園に代わって多磨墓地が近くにあり、東京とは思えない野川公園も目の前で、森が広がっています。ロシアの大哲学者フョードロフは、「世界は神殿ではなく墓場である」という名言を残しています。その意味ではロシアをやるには良い環境といえます。早速周辺を歩いてみましたが、冗談まじりに、まるでザモスコーヴィエみたいだと学生につぶやいていました。染井には二葉亭の墓がありましたが多磨墓地には、トドロヴィチ先生の後任者ミチューリン（米仲林）先生の墓があり、これまで佐藤純一氏（昭28卒）が、未亡人の依頼で墓を守ってきたという美談を最近知りました。また、ゾルゲ事件のゾルゲの墓もあり、ロシアとは少なからぬ関係があると判明。是非とも十一月のロシア会の例会にはご出席下さり、ご自分の目でご覧になって下さい。

団体の「文学散歩」などで訪れる人の絶えない二葉亭の墓所を示す道標

二葉亭の墓所の道標

ところで、前号で予告しましたように、これからも訪れる人があるよう染井の二葉亭の墓の所在を示す案内標（写真参照）をロシア会の名で寄贈しました。それにしても、こんな小さな寄付の許可を取るために、石原慎太郎都知事に許可願いを提出させられたのには驚きました。

最近の大学の動静

ハード面のことばかり書きましたが、大事なのはソフトです。すでに新聞等でご承知のように、目下、四大学（外語、一橋、東工大、医科歯科）連合の計画が進行中、早ければ来年四月から発足する勢いです。学内には賛否両論がありますが、二十一世紀の開かれた大学の先駆けになることは確かなので、外語が近代日本で担ってきた独自の役割が失われることのないように、積極的に参画していかねばならないでしょう。

昨年刊行された『東京外国語大学史』をご覧になれば分かるように、明治六年以来、外語は規模が小さい割には、驚くほど多彩な人材を輩出してきました。その伝統は誇るに値いします。その気概だけは教鞭をとる者として忘れないようにしたいと思います。全学移転といっても、体育施設やAA研、留学生日本語センターの移転は、予算の関係で暫らく遅れます。その間、学生諸君には不自由をかけますが、むしろそのマイナスをバネにして、西ヶ原時代のあのエネルギーを保持してほしいものです。

ここで今春の卒業生の名前と進路をお伝えします。

二〇〇〇（平成十二）年三月卒業生氏名と進路

ロシヤ・東欧語学科（ロシヤ語）　旧課程

橋本公子　東京エレクトロン
桂木小由美
北村雄介　日本放送協会
丹澤彰宏　山梨県庁
横森寛和
ロシア・東欧課程（ロシア語専攻）
藤井裕之　コミュニケーション科学研究所
林　康弘　ワーナーミュージックジャパン
肥後裕希
平津一朗　ニポロス
飯島裕子　日本SGI
石和秀介
伊藤奈佳　山形県立酒田西高校
陣　高宏
岸本正寿　東外大大学院
松澤暢子　東外大大学院
三浦綾子
宮口一徳
中島隆夫　東外大研究生
大澤俊朗　日本プロ野球コミッショナー事務局
作田　淳　東外大大学院
桜井雅人
鈴木仁美
高松法子　光通信
竹内睦子
武澤宏亮
舘野悠子
吉村麻実子
池田徹朗　東大大学院
堂口剛志　警視庁
福島美由紀　島村楽器
船塚久恵　ティー・エス・ビー
濱崎賢一　トプコン
橋田智宏　福岡放送
平野聖子　東日本旅客鉄道
細谷未青
飯田絢子　タムラ製作所
稲田佐和子　山崎製パン
河治美由紀　水処理エ～ス
川本由紀子　安田火災海上
川崎珠子　日ソ貿易
北詰崇浩　伊勢丹
中野幸男　東外大大学院
新田英子　鹿島商事
野口和宏　東京三菱銀行
小田上久美子
小川暁道　東外大大学院
太田真由子
大山加代子　メディカルエクィップメントクレジット
佐伯郁智　東大大学院
斎田安宏
斎藤羽衣子
境井奈央子　仙台放送
菅原直子　ニポロス
田中正和　JSR
寺田　静　日新情報システム開発
上杉潤一
山口綾子
山本美保　プリヴェチューリッヒ証券
山下昌美　コナミ
吉田理美

最近の就職事情

この数年、日本経済の不況のあおりで、就職率が以前に比べ下がっていることは事実ですが、留学志望者、大学院浪人や資格試験の準備をしている者も相当多いので、単純に就職率が下がっているとは言えません。世間で言われるように必ずしも学力が落ちているわけではありませんので、先輩諸兄姉のご尽力をお願いする次第です。

実り多いロシア留学

これまでも書いてきたように、ロシア留学は自由になり、今年も三年生を中心に二十名以上の学生がモスクワやペテルブルクに留学しています。こうした情況を受けて、近々ロシア国立人文大学と交換協定を締結する運びとなりました。ロシアの治安の悪さが喧伝されておりますが、留学組は日本では知り得なかった物質的貧しさと精神的豊かさを体得し、帰国後は見違えるほど逞しくなり、ロシア関係の仕事や研究に従事しています。

最近のトピックス

七月一日の朝日ロシア語ス

ビーチコンテストで、阿部容子（三年）が留学中に目にした物乞いをテーマに聴衆を感動させる話で見事二位を獲得しました。

また七月四日には、日露青年交流センターの招きで来日した五十名ほどのロシア学生代表団（今回の特徴は首都だけでなく、地方大学の学生が多かった）が、本学を訪問、授業を休講にし、全学生が片言のロシア語を駆使して学内を案内、その後アルコール抜きで二時間ほど交歓会を開き、ロシア民謡研究会の歌声に大喝采、すっかり打ちとけ、楽しい時を過ごしました。学生諸君は互いにアドレスを交換、今もメールのやりとりをしているようです。教室での授業も大事ですが、こうしたロシア人学生との直接の接触は、予想以上に刺激となるようです。今後ともこうした催しは積極的に行なっていきたいと思っています。

また、この種の学生交流の一環として、本学の学生も代表団の一員として、ロシア各地を訪問してロシア理解を深めています。

（ロシア・東欧課程総合文化講座教授　昭44卒）

ミチューリン先生のお墓のことなど

今号の「府中だより」にお名前の出ている、ミチューリン先生がご病気で亡くなったのは確か一九五七（昭和32）年の春、新学年の始まる前の休みの時でした。当時在学中だった私どもも、先生の柩が多磨墓地に埋葬されるとき参列したことを思い出します。日本で一般的な火葬ではなく、土葬で大地に帰すことを強く希望なさったミチューリナさんのお気持ちがあって、多磨墓地の表門を入ってすぐのところにある外人墓地に葬られることになったと思います。近くにはブブノワ先生のお母様のお墓もあったと記憶しています。

そっと教室の後ろに座る学生に「カムチャートカ、ナマケモーノ」とよく仰ったミチューリン先生の温顔を懐かしく思い出します。（昭34卒生）

一九九九年ロシア会総会・懇親会

昨年11月20日（土）に西ヶ原キャンパスで開かれました。

総会では、

①染井墓地の二葉亭四迷の墓所を示す道標が傷んでいるので、ロシア会で新しく道標を作り寄贈すること、

②東京外語会が作る『東京外国語大学同窓史』編纂のために寄せられたロシア科同窓の方々の原稿をロシア会として百周年記念文集にまとめて発行すること、が提案され、承認されました。

［①は、「府中だより」に報告されているように、すでに実現しています。

②については、現在、編纂委員長（野中正孝氏　E昭34）が各語科で集めた寄稿とその関連資料を素材に『東京外国語大学同窓史』の総合稿を作成中です。その完成の時に合わせてロシア語科の百周年記念文集を発行する、そのためにどのような日程で作業していくかについて関係者が相談しています。　付記］

懇親会では原卓也会長、現代ロシアを代表する作家である客員教授のソローキン先生の挨拶、語劇ヴァムピーロフ作「長男」の一場面の披露、やはり学生のラテンダンス、ロシア民謡研究会の合唱等々がありました。

ロシア会は在学生も会員なので懇談のときには在学生会員が友だちの留学生を連れてきて（東外大は留学生の在籍比率が国立大学中最も大きい）会場はインターナショナルな雰囲気につつまれました。

会計から

ロシア会の会費は前回もお知らせした通り、年会費二千円（送料七十円）又は終身会費三万円（送料百二十円）となっており、納入頂いた状況は左表の通りで、ご支援の程感謝致します。然し、納入人数は九八、九九の二年度を合算しても、終身会費で八一名、年会費で延べ二二七名で、会員総数二千名余から見ると非常に少なく、大部分の方が忘れていらっしゃるか、或いは、全体の同窓会である外語会と別立てである事をご存じないか、の何れかと、思われます。

特に九九年度の納入額は、九八年度の半額余りに過ぎず、先細りの傾向にあります。色々ご多忙中、しかも、外語会とダブってのお願いで恐縮ですが、ロシア会の維持発展の為に宜しくご支援下さい。

（追伸）終身会費納入済みの方にも払込用紙が同封されていると思いますが、作業上分別できなかったもので、廃棄して下さい。また、今回払込みされる方は、用紙の通信欄に必ず卒業年次を書いて下さい。お願い致します。

（井上　勝　昭25卒）

一九九九年度終身会費納入者（卒業年次順・敬称略）

染谷　茂、野中六郎、前神雄一、落合　裕、松井欣治、遠藤信夫、市川恒二、宮脇繁典、飯田規和、原田伸夫、新井康三郎、瀬頭茂一、伊藤　彰、岡谷英雄、窪田　清、関根礼子、高橋早苗、小川和男、三浦由多子、谷口勝佑、小宮信介、加藤茂、渡辺雅司、藤井修二、沢井吾朗、山崎　優、一柳富美子、小倉かおる

以上

東京外語ロシア会1998年度収支実績

（1999年11月20日実施、単位　円）

1	収　入	懇親会会費（@6千円×41名、除在学生）	246,000
		ロシア会本会計よりの補助	220,251
		合　計	466,251
2	支　出	料理代（支払先　西洋フード）	374,808
		飲物代（支払先　沢田商店）	83,181
		振込み手数料（２件）	945
		会場借用費（支払先　東外大）	7,317
		合　計	466,251

東京外語ロシア会1999年度収支実績

（1999.4.1～2000.3.31、単位　円）

1	収　入	終身会費（単価３万円、納入者　26名）	780,000
		年会費（単価２千円、納入者　92名）	221,000
		利息収入	1,526
		合　計	1,002,526
2	支　出	会議費（10／22　幹事会）	2,800
		払込票印刷代（支払先　郵便局）	2,100
		宛名ラベル打出代（支払先　外語会）	17,000
		会報作業費（印刷・封入・発送）	194,848
		会報郵税	149,021
		振込み手数料	630
		ロシア会懇親会費の補助	220,251
		合　計	586,650
3	差引計算、及び、繰越金		
		差引剰余金	415,876
		前期繰越金	2,216,514
		次期繰越金	2,632,390

プーチンのロシアを見る

平野　裕

モスクワは訪れる度にその顔を変える。この前は昨年、白夜の頃だったが、この一年でまた一段と明るくなった。デザインをこらした広告塔や立て看板が増え、夜のネオンも多彩で、目を楽しませてくれる。

新しい都心の建設工事が始まっているのも驚きだった。クレムリンの東、クツーゾフ通りの凱旋門近くに、ナポレオンとのボロジノの戦いで戦死した英雄バグラチオン将軍の巨像が昨秋、建立された。そこからモスクワ川をまたいで対岸のクラスノプレーシェンスカヤ地区へ長いショッピング・モスト（橋）が架けられていた。同地区の三十万平方メートルという広大な土地に、東京・新宿副都心のような大規模、多目的コンプレックスを建設する「シティ」計画である。

シティ計画でモスクワ川に架けられたショッピング・モストから見る市街の景観

モスクワはもうインターネットの時代に組み込まれている。取材の行く先々でインターネットによる事業拡大の説明を受けた。モスクワは国際社会の変化に敏感な大都市である。

このところロシア取材旅行は私たちの年中行事になっている。「私たち」というのは、新聞社の元モスクワ特派員を中心に毎回の取材グループが構成されるからである。変化の激しいロシアを専門とする者には、毎年、モスクワの空気に肌で触れておかなければ、認識のズレが生ずる。今回もモスクワからアゼルバイジャン、さらにバルト三国のラトヴィアまで二週間にわたって旅をした。

モスクワ滞在中、新聞紙面を賑わせていたのは、大統領府とロシアの二人の新聞王、ベレゾフスキーとグシンスキー両氏とのマスメディアをめぐる確執であった。この政府の介入はプーチン改革の方向をはっきり示している。

両氏ともエリツィン前大統領時代、国有財産の掴み取りで巨万の富を築いたオリガルヒ（新興財閥）たちである。九六年のエリツィン再選を助けて大統領に取入り、その頃、経営難に陥っていたテレビや新聞を次々に手中に収めて、隠然たる政治権力を握った。

ところが、プーチン大統領は六月、政府に批判的な独立テレビ（NTV）や有力紙「セヴォードニャ」を抱える「メディア・モスト」社のグシンスキー会長を詐欺・横領容疑で逮捕(世論の反発ですぐ釈放)したのに続いて、プーチン大統領実現に貢献した政商ベレゾフスキー氏にも、その全国ネットORTテレビの株を手放す様に圧力をかけているというのだ。彼らの横暴なマスメディア操作を憎んでいた一般市民はこのオリガルヒ制裁に拍手を送っている。

「エリツィンが残した廃墟に、新しい家を建てるのだ」赤の広場に近いロシア下院（ドゥーマ）でインタービューした共産党幹部の口から出たこの言葉は、政治の潮流変化を実感させてくれた。ロシア下院は前大統領とことごとに対立し、弾劾決議成立の一歩手前までいった。しかしこの前大統領の気まぐれな独裁政治の遺産を思い切って清算しようとするプーチン改革にかってはエリツィン批判の急先鋒だった共産党までが与党化してしまったのである。

昨年の連続アパート爆破事件の現場に供えられた犠牲者追悼の献花

モスクワではちょうど一年前の九月に発生したアパート連続爆破事件の被害者追悼行事が行われていた。住民が寝静まった深夜突然、アパートが轟音とともに崩壊する恐怖。それがチェチェン人の仕業と証拠もなしに断定されて、第二次チェチェン戦争に突入した。その当時、全く無名で登場したプーチン首相がこの戦争で終始、強硬姿勢をとったことによってあれよあれよという間に人気急上昇のきっかけとなった奇怪な事件であった。

このチェチェン戦争の最前線に送られている若い兵士たちの人権を守る運動を続けている人々がいる。その「兵士の母の会」代表のワレンチナ・メリニコワさんに会った。彼女は「地方の支部では連邦保安当局の立ち入り調査を受けるなどソ連時代に戻ったようだ」といい、「プーチンは現状を守るシステムから出てきた人物だ」と言い切っていた。プーチン政治に潜む復古調に乗って旧KGBなど特務機関の台頭を懸念する声がインテリの間に出始めている。

こんなアネクドートがロシア紙に出た。「プーチン改革でロシアには自由な新聞だけが残った。あとの新聞はすべて発禁になってしまった」

大統領府の言論統制の動きについて、プーチン政権が表面では「言論の自由を守る」と言いながら、叩けば埃がいくらでも出るオリガルヒの不正蓄財といった別件で圧力を加えていることを皮肉ったものだ。

いまモスクワはちょっとした日本ブームである。世界のどの都市に比べても、ここほど日本料理のレストランが中国料理のそれより優勢なところはないのではないか。「東京」「禅」「泉」「相撲さん」などの店名が新聞の広告欄に出ている。比較的安い店から「スシバー」と称するパブ的なもの、さらには高級料亭までさまざま。ルシコフ市長自慢のマネージ広場地下街にも「ラーメン」「ヤキトリ」の日本コーナーがあった。

クレムリン南のピャトニツキー通りの日本料理屋「仙台」に行った。私はビラフを注文したら少し水っぽいチャーハンが出てきた。友人はラーメン。醤油味ラーメンで「まあまあだな」いずれも五、六百円。店内に都はるみの演歌が流れる。お昼時だったが、きちんとネクタイ締めた若いビジネスマン風のロシア人客で結構、繁昌していた。器用に箸を使う。日本通がビジネスの箔つけになるとすれば、これはもう立派な社会現象である。

産業企業家同盟の事務所で、いまや若手企業家として頭角を現わしている三十二才のデリバスカ氏（シベリア・アルミ総裁）は「プーチン訪日の日本での反応はどうですか」と聞いてきた。その隣りで、ウォルスキー同同盟会長は「彼は独身で日本女性が好きなんだよ」と冷やかした。領土交渉は進まなくても、確実にロシアと日本の関係は未解

決の領土問題を媒介に近づいている。

「江川さんにこのロシアの変わり様を見せてあげたかったですね」と同行の三瓶良一氏（昭45年卒毎日新聞論説委員）が言った。江川昌氏（昭38年卒）も毎日のモスクワ特派員で数々のスクープを飛ばした記者だったが、七年前に亡くなった。私たちはその早過ぎた死に、彼がチェルノブイリ原発事故の一年後、現場取材した時の後遺症が係わっていると考えている。

三瓶君のお嬢さんは東外大在学中にモスクワ大留学したという話に「親孝行だねえ」と私が羨むと「娘は吉岡ゆきさんに習っているのですよ。不思議な縁ですね」と言った。吉岡ゆきさんの父、故忠雄氏もやはり毎日の敏腕記者だった。支局長としての赴任をモスクワで迎えた私は、ゆきさんをロシア人小学校に連れて行った記憶がある。もう三十年以上前のことだ。

今回の一行の中には数々の著書がある中沢孝之氏（昭36年卒長岡短大教授）、立命館大教授だった新井康三郎氏（昭33年卒）もいた。お二人とも元新聞記者である。卒業年次や会社は違っても、心が通じるものがあるし、日ロ関係を思う熱い気持ちは同じである。

「兵士の母の会」代表メリニコワさんと会う取材グループ

日本とロシアが仲良くなることは、両国にとっておおきなプラスになると私は信じている。ロシアはゴルバチョフ、エリツィン、そしてプーチンの訪日で東に顔を向け始めた。プーチンのロシアは日本の良きパートナーになる可能性があると、今回の取材の旅で確信が持てたことは収穫だった。

（昭28年卒）

ささやかな日ロ交流

佐野柳策

数年前、モスクワからサンクト・ペテルブルグまで、富士市日ロ友好協会の一員としてバスで旅をしました。その途中、トヴェリという町に立ち寄りました。川辺で小休止し、ふと見ると像が立っていました。台座にプーシキンの像と彫ってありました。作者はオレーグ・コモフと記されていて、ロシアで第一級の彫刻家のようです。この人の作品が、富士山を背景にして、富士市の広見公園にあります。なぜ、このような有名な人の作品が一地方の田舎の町にあるかといいますと、それなりの理由がちゃんとあります。

ご存じのように、一八五四年十二月四日、フリガート艦ディアナ号が下田港に来ました。数日後、大地震、それに津波、下田の町は壊滅状態、ディアナ号は戸田へ移動中駿河湾のどこかで沈没、その場所は今でも謎で学者たちの論争をよんでいます。プチャーチンはじめ、乗組員四百数十名、一人の死者もなく全員日本人の漁師によって救助されました。荒海を物ともせず、命をかけ、ロシア人を救うため、小舟を出した漁師たちは富士市の田子浦の漁師たちでした。ついでながら、田子浦というのは、あの有名な「田子浦ゆ　打ち出でてみれば　真白にぞ　富士の高嶺に　雪は降りける」という和歌でよまれた所です。富士山の裾野までその全貌が見える所です。漁師たちは自発的にロシアの水夫たちを助けたので、幕府の役人の命令でやったのではありません。そこに住んでいた当時の日本人の漁師は心やさしい人たちが多かったのでしょうか、遭難したロシア人を見過ごすことができず、手厚く保護し、世話をしたようです。何日かの滞在後ロシア人たちは、陸路、沼津を通って山越えし、戸田に辿り着き、そこで日本人と一緒になってヘタ号とう船を作ってロシアへ帰って行きました。

ところで、戦後ディアナ号の錨が田子浦で二本見つかりましたので、その一本を戸田に送り、もう一本は日ロ友好の基礎を作った記念として、また当時の漁師たちの勇気と人間愛を讃える意味で、田子浦の海から程近い場所に据え置かれました。ついでに、プチャーチンの像を作ったらどうかということで、伊豆の彫刻家がプチャーチンの像を作って、その場所に錨と共にプチャーチンの像が建てられました。ソ連崩壊の少し前に、ロシアのグザーノフという歴史作家と彫刻家のコモフさんがそこを訪れ、そのプチャーチンの像を見て、自分のイメージしていたプチャーチンと、それが違っていたのでしょうか、自分が作りましょうということになって、プチャーチンと小舟で櫓を漕ぐ二人の日本人の漁師の像を作りました。多額の費用をかけ、モスクワで製作、日ロ友好のためということで、わざわざ、モスクワから持ってきて、富士市にそれを寄贈したとのことです。

富士市広見公園のコモフ氏作プチャーチン像の前で
後列左から5人目パノフ大使
赤ちゃんを抱いた人の隣の隣が佐野氏

その像は非常に素晴らしく、充分鑑賞に値するもので、ロシア人の彫刻家の作品では、我が国に於いて最高級のものの一つではないかと思います。しかし、舟を漕いでいる二人の日本人漁師が、少々、日本人ばなれしている感じがしないではありませんが。もし皆様の中で、日本とロシアとの外交史や彫刻に興味のある方がおられましたら、ご連絡いただければ喜んでご案内いたします。何年か前に富士市と東海大学が共同してディアナ号の残骸を発見しようとして、駿河湾の海中を探索しましたが、見つかりませんでした。探し方が悪かったのでしょう。ディアナ号には金貨が載っていなかったようですので、その後、誰も本気でさがそうとしないようですが、日ロ友好のために、誰か発見しようという有志がいないものかと思っております。

今まで述べてきたような関係で、数年前に富士市に日ロ友好協会ができましたが、どこの上部団体にも属しておりません。独自に活動し、昔、私たちの先祖がロシア人に接したように、暖かい気持ちでロシア人と関係を持とうと、ささやかな努力をしております。モスクワの少年サッカーチームが来て交歓試合をしたり、少年野球チームが来たり、

野球道具がないというので、市民に呼びかけ、グローブやバットを集めて送ったり、サンクト・ペテルブルグの少年少女合唱団が来て、市の文化会館で公演したり、ロシア大使館付属の小学生たちに来てもらって、地元の小学校で小学生と交流会をやったりしました。会員数三十数名の小さな団体で、お金もあまりないので、正直のところ、今年は何をしようかと会員たちは頭を悩ましているところです。人口二十三万人の富士市には外国人が二千人ぐらいいると言われていますが、ロシア人は、日本人と結婚したロシア人が三人いるだけです。国際化と言われて久しいですが、日本とロシアとの関係は、田舎では、こんなものです。それでも、ほんの少しの交流で日本を少しでも知ってくれるロシア人が多くなれば、そのうちに北方領土問題も、解決の方向に向かうのではないかしらと、淡い期待を持っております。（昭26卒）

（7頁3段目より）

から、まさにミール・チェーセンである。今、外語は転機にさしかかっている。そんな時だからこそ、明治期外語学徒の気概を肝に銘じるべきだろう。

（渡辺雅司　昭44）

語劇を演じて

成清圭祐

昨年、私は西ヶ原キャンパスで最後となる外語祭で語劇を演じた。演目はヴァムピーロフの『長男』だった。ざっとあらすじを書くと、田舎町で遊びすぎ、終電を逃した二人の青年、ブスイギンとシーリワは一晩を過ごさせてくれる家を探し回る。たまたまサラファーノフとその隣人マカールスカヤの会話を立ち聞きした二人はサラファーノフ家に入り込み、少しでも長くこの家に居ようとあれこれと弄するうちに、シーリワがこの家の息子ワーセンカに、「ブスイギンは腹違いの兄である」という嘘をつく。こうしてまんまと酒と食事にありついた二人ではあったが、そこへ主人が帰宅し、嘘をつき通さざるを得なくなる。しかし、主人にも過去があり、彼を息子だと信じ込んでしまう。ブスイギンはこのお人好しの主人への罪悪感とその娘ニーナへの想いから、しばらくこの家に残ることを決意する。その後ニーナの婚約者の登場、婚約の破棄、ワーセンカの家出騒動や放火騒ぎなど様々な事件が次々と起こる。最後は良心の呵責に苛まれたブスイギンが嘘をついていたことを告白し、この家を去ろうとするが、またまた終電に乗り遅れ、「終電に乗り遅れちゃった！」のセリフで幕となる。

私は最初、ロシア語の練習になればという程度の気持ちで端役を希望した。元来、人前に出ることの苦手な私は、端役でも勇気を振り絞って希望したのだが、まわってきたのは、なんとブスイギンという大役だった。有無を言わさず決められたキャストに逆らう術もなく、引き受けるしかなかった。

かくして、本番へ向けた練習が始まったのだが、約二ヵ月間の練習は、「ヴァムピーロフにも勝る」と言えば、天才と呼ばれたこの劇作家に失礼かもしれないが、彼の喜劇にも劣らぬほど喜劇的であった。もっとも、我々の「二ヵ月間の喜劇」はなにが飛び出すかわからないドタバタ劇ではあったが。サラファーノフ役の役者が本番の一ヵ月前に骨折で降板するというアクシデントもあったが、我々の練習はいつも笑いが絶えなかった。ヴァムピーロフの『メトランパーシ物語』で遊び人のカマーエフは見知らぬ人々に「カマーエフです。」と自己紹介したあと、「教師をしております。」と付け加える。これは稽古場での役者のアドリブを、ヴァムピーロフが戯曲に取り入れさせてもらったのだと言う。我々も同様に、アドリブをだしあい、笑い合って劇を作っていった。はじめ、あまり乗気ではなかった私も、気づけば、毎日朝10時から夜10時くらいまで、そして帰宅してからも深夜2～3時まで練習に励むほど語劇にのめりこんでいた。もちろん私だけではない。その二ヵ月間はみんな語劇漬けだった。一つの場面で、各自の解釈をぶつけ合って、何日も話し合った。（いや、言い争ったと言うほうがよいかもしれない。）ブスイギンがニーナに「本当は君の兄貴じゃないんだ」と打ち明ける場面で、ニーナ役の早瀬さんは、兄妹という壁がなくなった二人はこの場面でキスをしたほうが良いと言った。しかし私は頑なにそれに反対した。その場面でキスをしてしまうと、その後のセリフと気持ちとにギャップが生じると思ったからである。女性からのキスの申し入れを断るとは、なんともニクイことをやったものだとは思うのだが、そうさせたのは私ではなく、ブスイギンだった。

今思うと、あれほどまでに作中人物に感情移入して物語を読んだことはなかった。登場人物の気持ちになって演じてみると、なるほどそのような行動をとるだろうなと納得し、改めてヴァムピーロフの描写の的確さを思い知った。今年から柄にもなく文学を専門に選んだ私にとって、この経験とそこからの発見はとても貴重なものとなった。しかしながら、だからと言ってうまく演じられると言うものではない。私の演技が「演じる」とは程遠かったことは自覚している。加えて、本番では通りすがりの隣人との場面をとばしてしまった。皆で作り上げたという気持ちが強かったぶん、ショックは大きかった。劇の途中でとばしてしまったことに気づき、その後、劇の間中そのことばかりを考えていたことを今でもはっきりと覚えている。こうして我々の「二ヵ月間の喜劇」は、私にとっては悲劇的な結末を迎えたのだが、今ではそれも良い思い出となった。（とばしてしまった二人の友人には本当に申し訳ないが……。）

ロシア語の練習にと始めた語劇であったが、それ以上にいろいろな体験をし、得たものも大きかった。今年から新キャンパスに移転するが、語劇という外語大の伝統はこれから先、ずっと引き継がれていってほしいものである。

最後に、役者、スタッフのメンバー、また様々なご指導、助言をくださった方々に心から感謝します。（ロシア・東欧課程ロシア語専攻三年）

一九九九年外語祭ロシア語劇
ヴァムピーロフ作『長男』
演出　木村陽子
キャスト
ブスイギン　成清圭祐
シーリワ　栗秋俊祐
サラファーノフ　圓角史人
ワーセンカ　佐々木健
ニーナ　早瀬尚美
マカールスカヤ望月ありさ
クジーモフ　渋沢　聡
女の子たち　中川麻衣
小崎友佳子
隣人　大西史恵
田村祐子

語劇の終わったあとで

シベリアを横断した日本人

今でこそ鉄道を使ってのシベリア横断は、学生たちも休暇を利用して、いとも簡単にやってのけるが、これが明治時代となると命がけの大冒険であった。ペテルブルグからの帰途、馬車でシベリア横断を果たした榎本武揚、ベルリンから単騎横断の快挙をなし遂げた福島中佐の事例は当時のマスコミでも大きくとりあげられたので、その後も語り種となり、知る人も多いであろう。

しかし、単身徒歩で、一万キロ近い道程を踏破した人物が、明治前期に二人いて、そのいずれもが外語関係者だったことは、一部の研究者をのぞいてほとんど知られていないのではあるまいか。第一の人物は嵯峨寿安、加賀藩派遣の留学生で、明治三年に露都から浦塩まで徒歩で帰還、一八七六年から一年間旧外語で教鞭をとった人物である。この謎を秘めた人物については、同窓の左近毅氏が精力的に資料の発掘に努めているので、いずれ一冊の評伝が出るものと期待している。

ここで、私が紹介したいのは、やはり外語で教鞭をとりながら、明治十八年の外語廃校を機に弟子の二葉亭等とともに、教職を捨て浦塩にわたり、女郎屋の用心棒をしていたとされる黒野義文である。直参旗本の出である黒野は、ガリバルジの副官をつとめ、西郷隆盛の招聘で来日、旧知の文部卿木戸孝允の斡旋で外語に着任したメーチニコフの一番弟子のひとりである。

おそらく外語の同窓で文部省と対立、放校処分になった安藤謙介（彼は勝海舟の推薦で外務省に入り、ペテルブルグ大で日本語を教えた。後に富山、千葉、愛媛、長崎、新潟県知事、衆議院議員、横浜、京都市長を歴任）、あるいはその後任西徳二郎の紹介であろう、なんとこの用心棒のもとに露都の大学での日本語講師の招聘状が届くのである。経済的にも困っていた黒野にしてみれば渡りに舟の話のはずなのだが、なんと彼は半年以上の時間をかけて、シベリアを横断し、悠然としてペテルブルグ大学に乗り込むのである。しかも彼は、それ以後生涯日本に帰国することなく、革命後の一九一八年にコレラで客死している。彼の豪傑ぶりは外語時代から有名で、着流し姿に鉄棒をかつぎ、放課後は近くの牛鍋屋でビールと鍋を十人前たいらげていたとの伝説もある。

ロシアにおける彼の知名度は黒田清隆よりもうえで、ブロックハウスの百科事典にもかなり詳しい記述が残っているほどだ。ペテルブルグ大学日本語科にロシア人助教授コストィリョフ（彼もかつて外語の教師だった）が着任するのは一九一二年のことだから、その間黒野一人が日本語教育を担当した。

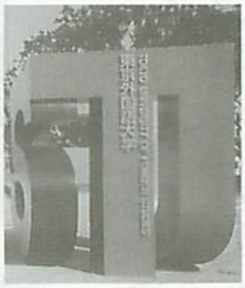
それだけなら単なる豪傑談で終わってしまうのだが、黒野の凄いところは、その後のロシアにおける日本学の碩学を多数育てたことであろう。コンラッド、ラミング、エリセーエフ、スパルヴィンと名前をあげるだけで十分だろう。昨年短期間ではあるがモスクワに滞在した私は、ノーベル賞詩人プロツキーの映画を撮った女性ディレクターのインタビューを受けた。なんと彼女は今、エリセーエフの映画を制作中だったのだ。

かのエリセーエフ商会の御曹司で夏目漱石門下生として、外国人として初めて東大で銀時計を受けた彼の数奇な生涯がいま故国で脚光を浴びはじめている。寄席、花柳界、日本舞踊と江戸文化の粋をきわめた彼は、パリ大学教授を経て、ハーバード大学日本語科主任となり、後の駐日大使ライシャワーの恩師となるのだ

（6頁1段につづく）

府中キャンパス点描

研究講義棟、教育と研究の中心となる施設。東西二つの建物が中央部の8層吹抜けの空間（ガレリア）で結ばれている。地下1階、地上8階。多磨墓地前駅からはこの建物の上部がそびえて見える。



正門
（西アライバルコート）

「対話と交流をベースとして世界に開かれたキャンパス」を基本理念として設計された新キャンパスには外界を隔てる門扉や塀はなく、緑の植込みが周囲との境界線となっている。

ロシア会の開かれる大学会館
食堂、売店、集会室があり、池に面して茶室もある。

キャンパスプロムナード・モール
左に図書館、大学会館、右に研究講義棟がある。

二〇〇〇（平成十二）年度 ロシア会総会・懇親会のお知らせ

今年は懇親会で和久利誓一先生の卒寿のお祝いをいたします。会場は新しい府中キャンパスです。左記の要領で開催しますので、お誘い合わせのうえ、ふるってご参加くださいますよう、ご案内申し上げます。

なお、当日は外語祭が行なわれております。

日　時　十一月十九日（日）
午後一時半から　総会
午後三時から　懇親会

和久利誓一先生の卒寿を祝う会
懇談・ロシア民謡やラテンダンス
などの学生によるアトラクション

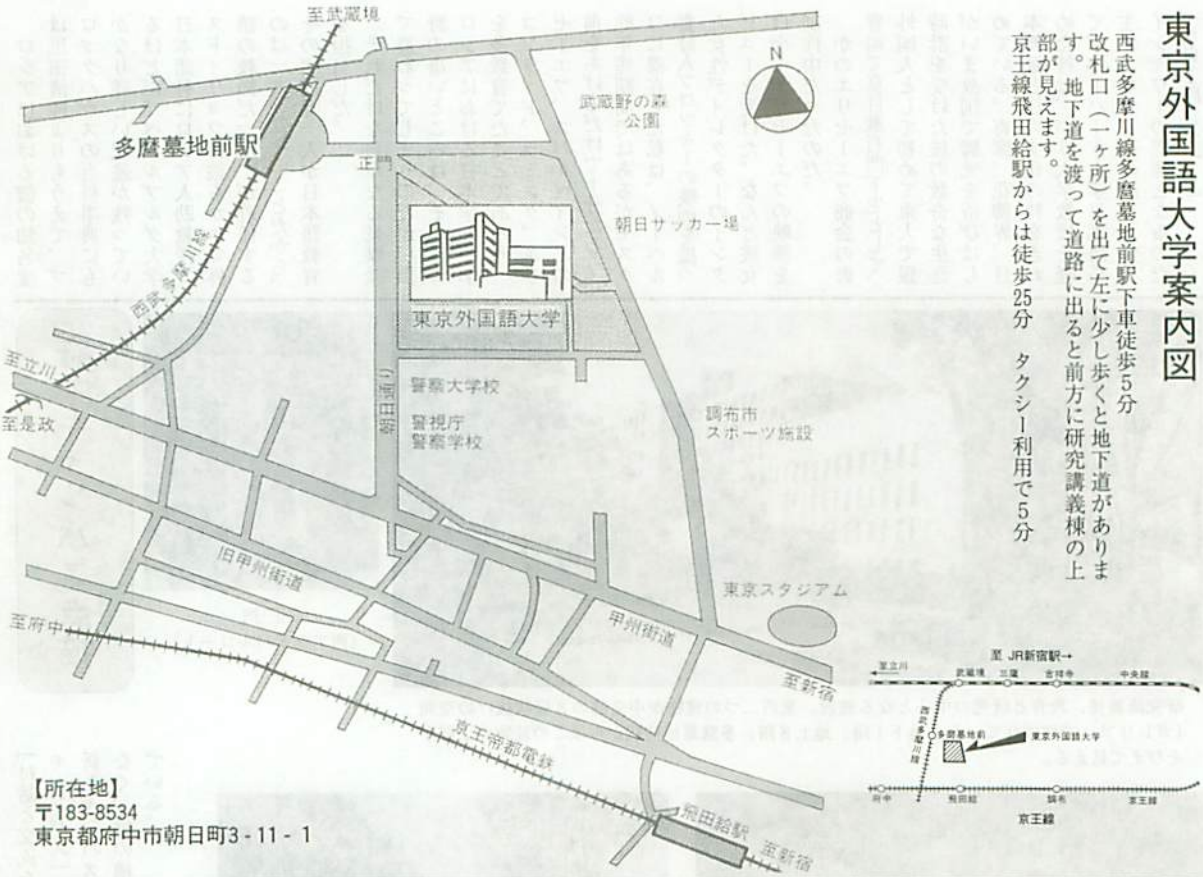
会　場　東京外国語大学大学会館
一階食堂
（下の案内図をご覧ください）

会　費　七千円（学生は無料）

当日欠席の方で和久利先生のお祝い（記念品）に参加される方は同封の振込用紙をご利用になって、三千円お送り下さい。その場合は通信欄にその旨を明記して下さい。年会費または終身会費と一緒に送金なさる方は通信欄にそれぞれ明記してください。

東京外国語大学案内図

西武多摩川線多磨墓地前駅下車徒歩5分
改札口（一ヶ所）を出て左に少し歩くと地下道があります。地下道を渡って道路に出ると前方に研究講義棟の上部が見えます。
京王線飛田給駅からは徒歩25分　タクシー利用で5分



【所在地】
〒183-8534
東京都府中市朝日町3-11-1

編集後記

◇11月19日（日）に開かれるロシア会のご案内をかねたロシア会会報復刊第3号をお届けします。

この会では和久利誓一先生の卒寿のお祝いをいたします。多くの方々のご参集をお待ちしています。

会場となる府中新キャンパスは、はじめての方も多いと考え、8ページの案内図のほかに7ページに写真を主としたキャンパス紹介記事を載せました。

◇この夏に母校は西ヶ原から府中キャンパスに移転、10月1日からの後期の授業が新キャンパスで行なわれています。11月19日は外語祭も開催中です。

◇夏の暑い最中、早速原稿をお送り下さった原先生をはじめ、ご寄稿下さった方々にお礼を申し上げます。平野氏の「プーチンのロシアを見る」は9月に訪露され、帰国後すぐにお寄せ下さった最新のロシア情報です。佐野氏からは心温まる民間の日ロ交流の、在学生の成清さんからは昨年の語劇の記事をいただきました。

◇年一回の発行であるため、会報として十分機能しているか課題が多いと思っています。（町田裕子　昭34卒）